

明治家実業列伝 ⑮

佐藤 亀八郎

仙台市博物館 市史編さん室長 菅野 正道



柳生の紙づくり

産業の近代化は、ものづくりから季節感を少しずつ奪っています。しかし、伝統的な産業には、季節に従ったものづくりを保っているものが、まだ幾つも残っています。日本酒がその代表例ですが、紙漉き（和紙づくり）もその一つです。紙漉きは、農家の副業であり、また和紙の繊維をつなぐ接着剤のトコロアオイが低い温度でないと接着力を維持できないことから、冬に行われる作業でした。

仙台市太白区柳生地区は、このような紙漉きを江戸時代から途絶えることなく行ってきた地域です。今その伝統を保っているのは僅かに一軒だけですが、戦前までは集落の大部分が紙漉きを行っていたのです。

柳生の紙漉きは、幕末から明治にかけて技術改良が行われ、農閑期の副業として普及したのですが、その功労者の一人として忘れることができない人物がいます。それは、後に貴族院議員となる実業家佐藤亀八郎です。亀八郎は、若くして紙漉きの組合の代表となり、さらに明治三十一（一八九八）年に製紙業の振興を目的に柳生に製紙伝習所を設立するなど、柳生の製紙業のリーダーの一人でした。

地域社会のリーダー

佐藤亀八郎は、明治四（一八七一）年に柳生の農家で生まれました。生家はやはり紙漉きも手がける農家でしたが、同時に多くの土

地を所有する有力な地主でもありました。

地主というと、戦後に地主制の解体が占領軍主導で強行されたこともあり、ともすればマイナス面が強調されがちです。確かに、地主の中には高額な小作料を取り、農村に大きな貧富の格差をもたらす場合もありました。

しかし、地主の全てがそうした「搾取者」ではありませんでした。とくに村に住み、自らも農業を営む地主の中には地域社会のリーダーとなる者もあり、また財産の一部を地域に対して還元するという意識も一般的でした。例えば、学校や村役場を建設する際など、地域の地主が敷地や多額の資金を寄付することは、全国的に見られた事象です。

佐藤家もその意味で、柳生という地域に根ざした地主でした。平年の二割程度の作柄となった明治三十八年の大凶作の時、亀八郎は自ら実情の調査を行った上で、収穫「皆無」という扱いにし、小作料を全額免除したうえ、困窮者に対して資金の無利子融資を行っていました。後に地元の村役場の建設資金を寄付したことや、先述した製紙伝習所の設立も、地域社会のリーダーとしての役割を自覚した行動だったと言えるでしょう。

県政の場から経済界へ

県立宮城農学校卒業後、東京で簿記や法律を学んだ佐藤亀八郎は、明治三十六（一九〇三）年、県会議員に当選します。以後、昭和二（一九二七）年まで、二十四年にわたって亀八

郎は県政に携わりました。これだけの長期間、当選を重ねたのは、地域のリーダーとしての人望が厚かったことを証明しています。

県会議員としての亀八郎は、地主出身ということもあり、農政問題に積極的に取り組みました。また、県営電気事業推進にも大きな役割を果たしました。大正期、県内各地に中小の発電会社が乱立していたのですが、電力の安定供給を目的に県は電気事業を統合して県営化することを目指しました。これに対しては、多方面からの反発があり、昭和四年に県営化が果たされるまで、多くの困難がありました。県会議員としてこの事業の推進を図ったのが亀八郎でした。また、東北学院や常盤木学園に大きな援助を与えるなど、亀八郎は教育にも大きな関心を寄せていました。

こうして、県会でのキャリアを積む中で、政治家、そして経済人としての力量を認められた亀八郎は、大正十四（一九一四）年に宮城県農工銀行の頭取に就任し、昭和七年には多額納税者として貴族院議員になっています。頑健な体格で、座輿に土俵入りを披露するほど相撲を好んだ亀八郎でしたが、病には勝てず、昭和十一年七月十五日に亡くなりました。仙台の実業界の新しいリーダーとしての活躍が期待される中で、早すぎる死でした。



戦前、柳生産の紙は障子紙などとしても仙台付近で広く用いられていた

仙台市史

好評発売中

特別編4 市民生活

明治以降の人々の暮らしを、豊富なカラー図版とともに紹介

◆B5判 620頁 オールカラー ◆定価6000円(本体5714円)

お求め先 県内主要書店・仙台市博物館/櫛宮城県教科書供給所 TEL.022-235-7181 FAX.022-235-7183
お問い合わせ先 仙台市博物館市史編さん室 〒980-0862 仙台市青葉区川内 26 番地 TEL.022-225-3074



明治・大正期、官公庁や学校、銀行などは、洋風建築で建てられることが多かった。写真は、東二番丁（現在の小田急ビル付近）にあった宮城県農工銀行